学 位 論 文 内 容 の 要 旨

学位申請者	髙山　純子 【ジェンダー学際研究専攻　平成26年度生】	要　　旨
論 文 題 目	子育て期の共働き夫婦による家事のマネジメント： 分担と外部化の視点から	妻の仕事と家庭の二重負担は 1980 年代より指摘されてきており、社会学などの研究の蓄積も多い。しかし、これまでの研究で扱われてきたのは家事の一部の項目であり家事行動からは「見えない家事」の存在が見落とされていることが多かった。このような背景をもとに、本研究では子育て期の共働き夫婦がどのように家事に対処しているのかについて、家事のマネジメントの観点から明らかにするのが主な目的であった。また、家事負担を軽減するための家事の外部化がどのように検討・実施されているのかを夫婦の意思決定に着目して明らかにした。研究方法は半構造化インタビュー調査であり、対象者は首都圏に住む核家族で、末子が小学生以下の子どもを持つ共働き夫婦かつ炊事・掃除・洗濯のいずれかを日常的に分担している夫婦であることを条件とした。インタビュー調査は 2017 年 9 月から 2018 年 6 月にかけて実施され、計 32 名の協力者から得たデータは継続的比較法の手法を用いて分析された。 主な結果として、家事のマネジメントは sentient activity（他者の生活と生存を支えるための行動）に基づく基本的なマネジメント、夫婦間の分担のためのマネジメント、家庭外とのマネジメントの 3 つに分類された。また、夫婦間の家事に対する期待水準の不一致から分担するのが困難と感じている対象者も多く、その対処法として妻は夫に任せる家事役割を再定義したり、夫は衝突を回避するために妻の要求に合わせるなどをしていた。家事の外部化は、経済的コスト、家庭内のニーズ、就業状況、周囲で利用者がいるのかなどが判断材料となっていた。 本論文は以下の点で高い評価が得られた。第一に、インタビューデータの詳細な分析から、夫婦間の家事マネジメントのプロセスが検証できたこと、第二に、家族社会学や家庭経営学などの学際的な視点を援用して家事のマネジメントを多角的に捉えて分析したこと、第三に、家事がどのように行われるのかに関して sentient activity の視点から家事の「見えない」部分が検討できたこと、第四に、家事の外部化における夫婦のマネジメントを明らかにしたこと、第五に、夫婦間の家事分担に関して学術的、教育的、実践的なインプリケーションを導き出したことである。
審 査 委 員	（主査）　教授　　石井クンツ　昌子	
	教授　　小玉　亮子	
	教授　　平岡　公一	
	准教授　斎藤　悦子	
	准教授　西村　純子	